

新企画

研修医・指導医リレーエッセー③



## 研修医としての成長と挑戦の日々

独立行政法人 国立病院機構 岡山医療センター 初期研修医 近藤 大翔



岡山医療センター初期研修医2年目、岡山大学卒の近藤大翔、高知県出身です。このような機会をいただきまして、大変光栄です。1年間は本当にあっという間でしたが、振り返ると多くのことを学び、成長を実感する一方で、たくさんの挑戦と苦悩もあったことを感じます。初期研修を始めた当初、実臨床の現場に身を置くこと自体に強い緊張感を感じたことを覚えています。学生時代の実習は座学で学んだ知識を中心として、指導医から課題を与えられてそれを発表するといった実習が多かったと思います。しかし、特に研修医がメインとなる救急外来の場では自分で鑑別や検査を考えて診療する必要があり、想像はしていたものの実際に目の前に患者さんがいる状況で学生時代の知識を生かすことは、かなり難しかったです。最初は検査のオーダーや物品の使い方、患者さんへの説明の仕方などに苦労し何度も助けを求めたことがありましたが、2年目の先輩や指導医の先生方が優しく指導してくださり、その都度自信を少しずつ取り戻していきました。

当院の特徴の一つは内科が揃っており、豊富な指導医がいることだと思っています。4月から各科を1カ月ずつローテーションしながら、専門的な知識を学び、様々な疾患に対する診断・治療方針を考える力を養うことができました。また、疑問に思ったことを質問すると、どの先生方もその都度丁寧に教えてくださいました。知識だけでなく、胸腔・腹腔穿刺や内視鏡検査、CVカテーテル挿入といった手技面に関しても積極的に行うことができます。当院では学会発表にも力を入れており、研修医のうちにも何度も発表を経験している人が大半です。僕自身、学生時代に学会発表の経験はなく初めての学会発表でしたが、指導医の先生方に疑問点や質問対策の相談にも丁寧にのっていただき、無事発表を終えることができました。このように、知識、手技、学会発表の経験を研修医の頃から満遍なく積めるのが当院の強みであり、研修できてよかったなと思いました。

研修医生活の中で最も大変だと感じたのは、精神面と体力面です。初期研修を始めた頃は、右も左も分からない状態で、毎日新しい出来事の連続でした。特に5・6月にローテーションした救急科では、様々な症状の患者さんが次々と受診され、対応に追われることがしばしばありました。また、初めて夜間の当直を経験し、普段の何倍も体力を消費し、できないことが多いことに対して気持ちが落ち込みそうになることが何度もありました。こうした状況では自己管理が大切だなと感じました。規則正しい生活を送れる日は送ることは勿論、旅行や趣味に没頭する時間を確保するなど、定期的にはリフレッシュする時間を取ることで辛いことも乗り越える力を与えてくれることに気づきました。また、先輩や指導医に相談することの重要性も感じました。周囲のサポートがあったからこそ、この1年間を無事に乗り越えられたと思っています。

